

メディア研究史における R. パークの位置 —地域ジャーナリズム論への道程・「移民社会」の到来を前に—

田村 紀雄*

週刊地域新聞記者からシカゴ大学教授へ

ロバート・パーク (1864 - 1944) といえば、ジャーナリズムやメディア研究者・学生には、標準的なテキストであるシュラム編『マス・コミュニケーション』所収の論文「新聞の博物学」等によく知られている。しかし、発行部数1千部単位の小都市の地域ジャーナリズムのインターン記者から出発して、シカゴ大学教授、同学部長、全米社会学会会長等を歴任、コミュニケーション研究の基盤研究を生み出す「シカゴ学派」の学統をひきいた伝説の学者であることはそれほど知られていない。

また日本の若い研究者に知られた翻訳のあるパークの著作にシュラム著『実験室としての都市』（お茶の水書房・1986年）とパークとバーゼス共編『都市』（鹿島出版会・1973年）その他のなかにメディアに関する論文がある。これらの論文に共通するテーマ一つに「ヒューマン・エコロジー」「コミュニティ論」という研究上の問題提起がある。

日本では、社会学者、とくに磯村英一、中野正大ら都市社会学者のあいだで、その業績はよく知られてきたが、じつは、コミュニケーション学のうえでも、重要な学者である。

とくに、「コミュニティとコミュニケーション」「地域メディア」研究の分野で今日なお落すことのできない基本的な研究分野、理論、方法論を創造した。近年、我が国でも、「地域メディア」「地域ジャーナリズム」等の分野が注目されてきている。一国という広い社会のなかのコミュニケーション構造で、社会全体、国全体でのメディア流通がカバーできていない「地域」での役割が、都市化の変貌、地域開発、地域民主主義、住民運動、外国人の流入による文化の多様化など多くの理由で従来のメディアだけでは補いきれなくなったからである。

日本における「地域メディア」等のについては、拙著『日本のローカル新聞』（1968年）、同『コミュニティ・メディア論』（1972年）、論文「ローカル紙の生態」（雑誌『思想の科学』1965年2月）、同「地域紙における“送り手”研究」（『東京大学新聞研究所紀要』16号、1968年）以来の諸論考、その他を参照されたい。

また、パーク自身、ジャーナリストであり、たくさんのジャーナリズムに関するエッセイを書き、メディア研究をおこなってきた。

人間生態学は、その語源はいうまでもなく、自然科学からの借用で空間、時間、移動、種の相互関係等を解き明かそうというものだ。この種というのはパークらにいわせると、人間集団、その機関である新聞などであった。ダーウィンの影響のつよい競争、優占、遷移などの用語をもって人間集団を表現することに、批判はあるが、都市の形成に人々がどのような変容をするのか、をはじめ

*たむら のりお 東京経済大学 名誉教授

てメスをいれたのだ。

人間集団は時間的にも空間的にも、その社会的内容も静止してはいない。移動・変化・発展している。すくなくとも都市、その都市化、さらにその先、人は成長し、移動し、変化する。その過程を競争、優占、遷移等々の概念や用語が充当される。これらの用語法はのちに他の社会学者によって適応、共棲、同化などの用語法とともに吟味されるが、社会化や都市化は、それぞれの近隣集団（ネイバーフッド）が「コミュニティ」になり、それらを生態学的としたのである。この過程で重要なことは資源の有限性の問題、メディアもまた限りある資源だという考えを社会学に導入したことは、画期的であった。有限の資源というのは紙パルプ、通信回線、エネルギー、大地だけでなく、生き物としての人間、宇宙・電波空間、時間まではある。

この問題意識から、パークは都市化のなかで、たがいに社会関係をもって生成、変容している人間集団、とくに移民や移動によって生じるエスニック・コミュニティに研究関心をつよめ、多くの調査を実施した。ここに、人種、信仰、文化、その他社会的背景を異にする人々の存在、その運動を明らかにした。

これは、社会にあってマス・コミュニケーションの受け手といわれる構造、過程のなか、読者、視聴者が一様でなく、多様な性格をもっていることを明らかにしてゆく、そのごの研究に道を開くものであった。

とくに、アジア系移民への排斥のなか、1910年代、米国において日本人移民にたいして激しい排斥がおこなわれた際、パークは延べ数百人の研究者、協力者の動員と巨費を投じて日本人コミュニティに対して大規模な調査を実施し、排斥に根拠のないことを実証した業績のことはほとんど知られていない。

この大規模な調査はひとつの書物、報告書に纏められることはなかったが、社会学研究やコミュニケーション理論にのこしたものは小さくなかった。日本人排斥問題にも一定の政治的効果があった。さらに加えれば、この調査に参加した日系二世の大学院生や社会活動家に、研究者になったり、著述家になったりの成果ものこしている。

このパークの研究者として公正で実証的、科学的な姿勢はどのようにして生まれたのであろうか。背景となる人間としての思想、それを形成した成長期、経歴に注目したい。人間、生まれてから没するまでの生きた道のすべてが経歴であり、思想である。

パークはその84年間の生涯を全力でエスニック集団等の研究に走りぬけたためか、自伝的叙述はほとんどない。ただ、晩年に、勤めたフィスク大学（テネシー州）という黒人教育のために18世紀に設立された大学教員時代、秘書に口述筆記させ、死後書類のなかから発見された「自伝的ノート」と、かれの研究上の助手として西海岸の日本人調査でも大きな役割を果たしたウィニフレッド・ラウシェンブッシュが学位論文としてデューク大学に提出したパークの伝記的研究にその片鱗をのぞかせている。

ラウシェンブッシュは1916年オーベリン大学で社会学を学んだあと、26歳のとき、シカゴに移りパークの調査助手として働き始める。後年にはパークと逆にフリーのジャーナリストとして人種問題などの記事をかいて過ごしている。これも、パークに私淑して影響を受けたためだろう。

戦後、彼女による広範な文献渉猟、散在した個人文書や家族、同僚からの聞き書き、パークの秘書としての身近な観察にもとづいて執筆された論文で、この伝記を乗り越えるものはいまはまだな

い。パークに関しては、佐藤智雄やパークの弟子たちがいくつかの紹介論文等を執筆しているが、ラウシェンブッシュのものが最も詳しい。

これらを手がかりにパークの略歴をしめそう。

まず 1864 年に生まれ、1844 年に 80 歳で死去した社会学者、アメリカ社会学会の第 15 代会長、シカゴ大学社会学部長というのがかれの表立った「個人史」である。問題はパークが師 W. I. トーマスとともに活躍した「社会学のシカゴ学派」と知られたその社会学研究のなかみと、コミュニケーション研究史への貢献、またヒューマニズムにみちた人間への公正で偏見のない思想である。

これらの業績は 20 世紀の最初のころ培われたものだが、今日なお顕彰されている。「マス・コミュニケーションと世論の社会学研究の創立者の一人」(『ジャーナリズム・モノグラフ』誌 1979 年 11 月) という評価のように。

この思想はパークの家庭、生まれ育った中西部の小さな都市、そしてかれが横切ってきた日本をふくむ多数の国、文化、エスニック社会等でのいきざまや思考を生んだ土壌・環境に深く関係していると思う。

白人社会にも新旧、相互の確執、偏見、差別

パークの育った五大湖周辺の小都市という環境は典型的な中流の白人社会ではあった。言わば、英国風の知的な家族であった。一方、中西部のシカゴ、デトロイト、クリーブランド等の大都市には、18 世紀末にはアメリカの経済的発展とヨーロッパの国々での動乱や飢饉、経済的混乱等で、アメリカへ渡航する新移民、難民が次々とおしよせていた。パークの幼少期に過ごした町、ミネソタ州レッド・ウィング近郊にもスカンディナヴィア系の集落がうまれたり、先住民が街で物乞いすることを見かけるようになった。家庭でも、ノルウェイ人の家事ヘルパーを依頼したり、別のノルウェイ人の遊び仲間もうまれた、と書いている。

彼らと、わけへだてなくつきあったが、のちにパークが日本を訪問した際にかれらと「まったく偏見なく接した」と強調している。幼児・少年時体験である。ミシガン大学を卒業したのち、ジャーナリストをめざす。人間生活への関心である。社会学への動機も「ファースト」のなかの「書をすて、街にでよう」の生き方であると、よく述べている。ジャーナリストとして「人間社会を観察したい」ということで、まず、ミネアポリス、デンバーなどの中西部の都市の小新聞で「1 行いくら」のパートタイム記者として働くことだった。

多くのアメリカのジャーナリストは小さな地方都市の週刊コミュニティ紙から出発し、次第に中・大都市の日刊紙に移り、ニューヨーク等のジャーナリズムの中心地に「昇格」(上昇社会移動)してゆく。仕事の内容もフリーランス、「サツ回り」、社会部デスク、論説記者、やがて批評家、研究者、教育者、等々への道を開拓することだ。そして自らも新聞経営の発行人になることが共通の夢である。アメリカ的な起業家精神がここでも脈打つ。都市の小新聞を売買する市場も成立している。パークもまさしく、発行人になることを除いて、やや遠回りしたりしながらもこの道をあゆんだ。

それは人間愛に満ちた黒人生活へのアプローチ体験から出発し、黒人大学の教師としておえた。アラバマ州のタスキーギ学校(黒人の授産施設)からスタートし、テネシー州のフィスク大学(黒人のための大学)までの人生だ。その間にシカゴ大学での学部長やハワイ大学、南加大学、海外の

大学での勤務歴もある。

パークが大学卒すぐ、地域に密着した小さなコミュニティ新聞で働いたことが、地域に埋もれそうなマイノリティの移民や、まだ表舞台に出にくかった黒人の生活をよく観察できたのである。アメリカに限らないが週刊、タブロイド版、発行部数のすくないコミュニティ新聞が盛んな社会では住民の活動、意識が高く、「地域民主主義」の伝統が生まれやすい。パークが記者生活に乗り出した青春に身に付けたものは小さくない。

米加ではこのようなコミュニティ新聞は今日なお健在で米国だけでも数千種をくだらない新聞社が存在すると考えられる。小規模ながら独立不羈の言論と経営、家業として地域社会で尊敬をうけながら数世代を相続している新聞も少なくない。これらのコミュニティ新聞に記者等を供給することを主目的にしているジャーナリズム学部がある。

パークの人生スタートの社会的背景である。

パークが人間社会を観察、認識したいとする方法は当然、当初は足でかせぐ取材だが、この方法は研究者になっても、「社会踏査」という方法で受け継がれてゆく。かれが、パートタイム記者としてみたアメリカ社会は資本主義の成長期、そのあとの恐慌に内包する矛盾であった。失業、ストライキ、犯罪、貧困、家庭崩壊、少年犯罪そして階級や民族間の深い矛盾や対立にみちていたのである。そして加速する都市化、エスニック・コミュニティの割拠、抜きがたい文化の衝突などだった。

たとえばパークの職場のひとつデトロイトには、移民労働者やその家族向けに英語の新聞以外、ドイツ語、ギリシャ語、ウクライナ語、イタリア語など10数種の週刊紙が論戦を競った。フランス語や黒人向けのものさえあった。

移民労働者は当然、食事、信仰、教育等の独自性をもとめ近隣集団（ネイバーフッド社会）に、さらにエスニック・コミュニティに成長する。都市化、さらにその結果としてのスラム化や中流階層の郊外化も発生するのである。

パークはこの過程を注意深く観察していた。リポーターとしての職場のひとつシカゴはさらに複雑だった。五大湖海運、大陸横断鉄道の結節点として機械工業、食品工業、印刷業などの発達に寄与し、流通の一大拠点化していたこともあり、ヨーロッパからの白人だけでなく、アメリカ南部から大挙鉄路北上した黒人や西海岸から移動してきた東洋人、南アメリカからの季節労働者の群れ等が加わりはじめた。「都市化」には早くに到着したパイオニアの資源や利権の先取特権と、後着の移住者や新移民の再配分要求とのあいだに軋轢が発生する。

シカゴが稀にみる速さで都市らしくなった18世紀の最後の四半世紀、人口3万のうち早くも半数以上は海外からの新移住者であった。アイルランド、ドイツ、北欧などだ。まだ、黒人は微々たるものだったが、白人同士も確執は生まれていた。

この軋轢は白人同士のあいだ、WASPと東欧からの移民、WASPと有色人種、さらに「アメリカ市民」と非市民（ラテン系やアジア系）とひろがる。ときに、法律で、おおくは先入観、偏見などによるものだ。パークの時代、顕著になった。新聞、ニュース、世論といったことを科学的に分析したいと考え、ミシガン大学の門をもう一度敲いた。運のよいことに、ジョン・デューイにめぐり合わせ、新聞記者出身でニューヨークで経済記事を書いていた人物の紹介をうけた。

のちにパークが記者生活11年目頃の19世紀の末には社会学への関心がさらに深まったとしてい

る。

こんなことを述べている。「わたしは、コミュニケーションと集合行動に関心をもつようになり、大学はこれらをどう教えているか知りたいとおもった」(ラウシェンブッシュ)。当時、社会学はドイツから学ぶ気風がつよく、まずハーヴァードにゆくことにしたが、ここでは1年間だけ学んでいる。

哲学や心理学を学びなおすために、ハーヴァード大学、さらにドイツの大学へむかう。4年間のミシガン大学在学中、英哲学史やヘーゲル、カントを学ぶと同時に、各国語を学んだことが役立ち、4年間のドイツ滞在中にベルリン、ハイデルベルグ大学等でジンメルやビンデルバントらの指導を受けた。

どの大学でも著名な学者に師事し、得たものは少なくなかった。ことに、ハーヴァードでは、プラグマチズムの権威ジェームスのような偉大な教師に哲学的な影響を受けたが、人々のコミュニケーションや集合行動といった本来の希望した問題ではかならずしも充足できなかった。

結局、1903年、ハイデルベルグ大学でビンデルバンドと地理学者のA. ヘットナーを主査として博士論文『大衆と公衆——方法論的・社会的検討』を完成させた。これは当初ドイツ語であったが、1972年シカゴ大学出版局から英語版がでて、米国でもひろく読まれるようになっている。

この本の序文で、パークは、論文完成まで、デューイから、ドイツの各大学の教員にいたる指導、師事に感謝のことばをのべているが、とくに「わたしの哲学的着想の最終的な展開はビンデルバンドにもっとも負っている」と書いている。しかし、デューイの各方面あての親切な推薦文や紹介文ものこっている。よい師に恵まれたのだった。

博士論文が目指したものは、「社会集団」にかんするもので、「社会生活の高度な複合体で表出される集合の諸形態」であった。群衆、国民、セクト、その他の用語で呼ばれる諸形態をどのように哲学的、心理的、社会的に解明するかを、ドイツの諸大学に学びながら追い求めた。

諸家の言説や記者として見聞してきた豊富な事例、ドイツでの家族とともにゆったりした学問的雰囲気での思索によって4年間の留学をすごした。博士論文のなかで、パークが吟味した集合行動、コミュニケーション、社会過程等の概念はのちの研究・調査の根幹となる。

H. エルスナーが編集したパークの著作集のひとつで『ロバート E. パーク』(1972)にこの博士論文とともに収録されている論文「コミュニケーションと文化に関する考察」は検討に値する。

この論文は1938年、社会学会の雑誌に発表されたものであるが、この時期にはコミュニケーションという概念がJ. M. ボールドウィン、C. H. クーリー、G. H. ミード、S. ケース、オグデンとリチャードらによって、多数の業績が世にあらわれていた。「コミュニケーション研究の黎明期」とでもいえる時期であった。

パークはこれらをフォローしながら、文化的プロセスでのコミュニケーション、コミュニケーションと競合、普及、文化変容といった鍵になるタームを検討している。なかでも、ペンシルバニアの「質朴な人々」であるアーミッシュの社会で、どう変容または変容しないか、具体的である。ペンシルバニアは生まれ故郷でもあり、この少数派の人々が都市化に呑み込まれまいとする強靭さを見ているのだ。

パークをはじめ、この時期のシカゴ学派の社会学者はエスニック・マイノリティへの強い関心があった。重要なことは、かれら自身、移民やその二世が多数いたことである。ポーランド移民の書

簡を分析して名をのこしたズナニエッキはもちろんポーランド移民である。だいいちポーランド語が読める利点がある。「ホボ」とよばれる、ホームレスを分析したアンダーソンはスウェーデンとドイツ系の両親をもつ。ギャングを研究したランデスコはルーマニア生まれ、『スティグマの社会学』（日本語訳もある）の著書のあるゴッフマンもシカゴ大の大学院に学んでいる。かれはウクライナのユダヤ系難民を両親にしている。

キサブロウ、カワベは1919年「日本のジャーナリズムと言論」にかんする博士論文をだしている。S. F. ミヤモトは戦時中の日系人強制収容所のひとつツェールレイキの日本人コミュニティを研究してシカゴ大学で博士号をとり、のちワシントン大学（シアトル）の社会学研究を率いた。Y. キムラはハワイの一世の研究で、E. S. ウエキはシカゴへの二世の適応を論文にまとめてそれぞれ博士号をとっている。

T. シブタニは流言飛語を研究した。カワベを除き、ともに、戦後の「第二次シカゴ学派」とされる学風のなかでの一里塚である。

シカゴに戦前、日本人が住んでいなかったわけではないが、「近隣」といえるほどの程のものでなく、おおくは通過者であったが、戦後、戦時収容所等から、多数の日系人（一世と二世）が辿り着きコミュニティが生まれた。ウエキのあと、S. M. ニシもシカゴの日系人研究でやはり博士号を得た。

アメリカ、とくに大都市は移民の社会で研究対象にする学者は多い。おおくは海外に祖先の血がながれている。さて、「シカゴ学派」の主演となるのが戦前のパークだ。

黒人のためのタスキーギ学校へ

ドイツから帰国したパークは、まずハーバード大学に仕事を見出す。家族同伴で4年間におよぶ留学の結果、すぐには仕事の内容を選択してはられない。ポストは哲学の助手であるが、パークがわざわざ「助手（アシスタント）」で、助教授（not assistant professor）ではないと断り書きしているように、講座の助手ではなかった。将来、研究や講義が保証された講座助手ではなかったようだ。

これはパークに充足感を与えなかったし、かねてW. ジェームスの暗示にひかれ、現実の人間社会に再び足を踏み入れる決意をするに至る。このとき出会ったのが黒人の社会運動家のブッカー・ワシントンであった。奴隷として1856年ころ南部に生まれ、苦学して高等教育をうけ、自らも黒人のための職業教育、授産、人権のために生涯働いた伝説の指導者である。B. ワシントンは社会運動家である一方、教育者として全力で生きる。そのもっとも著名なのがタスキーギ学校（インスチチュート）の運営を引き受けたことだった。黒人に職業教育をほどこすべく設立されたが、1881年にアラバマ州で最初の黒人教師を養成するノーマル・スクールが開設されたとき、かれはそのリーダーとして招かれたのだ。教室は当初、地元の小さな教会が会場を提供し、やがて航空機の滑走路ももつ広大なキャンパスを農業プランテーションから手に入れて大学を建設した。第2次世界大戦では、ここでパイロット養成にもかわり、かれらは最初の黒人空軍将兵として欧州でドイツと闘っている。

R. パークとB. ワシントンとのめぐり合わせも、パークの黒人問題への関心であった。中西部の諸都市では南部から北上した黒人で あふれ、デトロイトでは1900年に人口の14%だった黒人が

1920年には4.1%にまでなっていた。貧しい新移住者は労働と低家賃に左右されて通例、都市の古い街区に集中する。いずれも、複雑な社会問題を引き起こしていた。

パークは黒人問題の研究に本気で取り組む必要をつよく感じた。そこでの生活はかれに、人種、コミュニティ、コミュニケーション、文化といった課題の研究・思索に大いなる糧をあたえた。

かれは、その短い自伝の後半で、黒人のための学校で働いたことで、活字ではえられない根底的なものを得たこと、それは黒人がゆっくりではあるが、着実に向上過程、社会に溶け込んでいる、歩みを発見、理解したことだと書いている。社会学で「上昇社会移動」「適応」「同化」などといわれる変化だ。南部から北部への「地域移動」は上昇のための引き金である。これは、黒人だけでなく、移民や移動によって国や地域という「居場所」を変える動機なのである。「文明の歴史過程」とよぶ変化である。

この時期、人種問題も文化としてとらえていることは大切だ。肌の色や祖先の問題でなく、文化である以上、発展もし、変化もする。また文化は一つでなく、多様で複雑な歴史をもっている。のちに社会学会の雑誌に発表した「文化と文化的傾向」(1925年)では、はやくも中国や日本の問題にふれている。「日本人調査」をしたすぐ後の論文である。

この調査の前からパークは一つの社会から別の社会へ移動して適応しないなんてことはないと感じていた。ラウシェンブッシュの伝記論文でも、パークが日本でもっとも虐げられ貧しい集団の出身の二世高校生が高い向学心をもっている例をあげて、そのアメリカン・ドリームの可能性に言及している。

タスキーギでの生活に転機をもたらしたのは、かれがここで初の黒人問題の全米規模の研究集会を開催したことだった。この集会にはシカゴ大学の社会学部長であった W. I. トーマスが招かれた。この巡り合いの結果、パークはシカゴ大学社会学部の非常勤講師に招かれ、これを機縁に再びアカデミズムの世界に入る。

シカゴ大学じたいが、大学創設時の環境とことなり、大きなキャンパスが、さらにそれを取りまく広大な黒人居住地帯に変化し、いやがうえにも黒人社会と向き合う状況になっていたのだ。さらにはシカゴ自体が、都市の発展によってヨーロッパからの移民の大波に洗われ、イタリア、ポーランド、ギリシャ、メキシコ等の人種、言語、信仰、文化のことなる人々に埋め尽くされようとしていた。

シカゴが5大湖、大陸横断鉄道、広大な農業地帯の交流点に位置し、畜産、農産、機械工業、出版業、小売り業、金融業、印刷業の一大中心地になっていた。18世紀末までには大陸横断鉄道や全米通信回線の完成をはじめ、太平洋岸、ニューヨーク、カナダ、メキシコ湾等の米国の四方八方を結ぶ鉄道網が完成し、シカゴはその結節点になった。ここに働く労働者を全世界から吸収していた。1893年にひらかれた万国博覧会はその象徴である。この博覧会、日本から日本土木会社等が出展し、出張した津田仙はカメラを購入してきている。また、多数の日本人記者もおもむいた。

大学は W A S P とよばれる以外の白人たちとの対応が求められていた。シカゴ市の行政者にも、研究者にもメキシコ系やポーランド系の人材が進出していた。新しいアプローチで黒人社会やエスニック集団と相対する必要が生まれていた。

だが、この時のパークは、フリーランスの新聞記者をやめてハーバード大学の門を叩いたときは違う。すでに20年ちかく、ドイツで学位をとり、タスキーギで黒人の世界にはいりみっちり

「人間世界」を熟知したことである。なによりも、人種、文化、歴史、社会関係等について、ふかい洞察力、熟慮、仮説、研究計画をもって大学の門をくぐっていたのである。

シカゴ大学で始めたこと

シカゴ大学でのパークの初講義はいうまでもなく、黒人問題であった。「ニグロ、その源流は奴隷である」ではじまる手書きの講義ノートがのこっている。現在は黒人は奴隷出身者ばかりでなく、世界各地から移入していることもあり、「アフリカ系アメリカ人」とするのが妥当だ。間もなく正教授になり、ゼミの学生を持つようになると、足で歩く社会調査をはじめめる。当初は経費上の問題もあり、新聞記者の「取材」「社会踏査」のような形態から、次第に規模の大きい「社会調査」に移っていった。

この都市調査を豊かにしたのには、シカゴ大学にトーマスはじめ、バージェス、ワース、ズナニエツキーといったすぐれた社会学者が集まってきていたからだ。研究方法も、在来の文献や学説を中心とする、いわゆる「ヨーロッパ種」から、実証的な「アメリカ種」を主流にしていった。同時に社会学部だけでなく、たの専門分野にも G. H. ミードやラスウエルのような学者とも影響しあえる環境から「シカゴ学派」の土壌になったのではないだろうか。とくにコミュニケーション研究においては、社会学部以外の研究者の貢献は特筆してもよい。

研究方法でも、社会調査、手紙などの個人文書の分析、聞き書き、ヒューマンヒストリー、新聞や電話番号簿の活用、参与観察その他、斬新な問題意識を駆り立てるものが工夫・開発された。研究発表、研究論文の形式にも新しい試みを取り入れられる。これらの多くは、シカゴ大学で旗揚げされていた社会学会の機関誌に発表され、「シカゴ・モノグラフ」として社会学に大きな影響をあたえた。

町村敬志が作成したパーク発表論文（72本）のテーマ別では、人種・民族が22本、新聞・与論が11本、都市が7本、文化・文明論が6本、人間生態学が5本、その他となっている。町村はまた新聞研究、人間生態学、人種民族関係論の3視点をクロスオーバーさせることがパークの基本的姿勢だとしている。（『実験室としての都市』1986年）

なによりも、シカゴは文字通りの実験室だった。シカゴの社会学者が中心の「シカゴ学派」のこの時期の著作・論文のテーマをみると、エスニック・マイノリティ以外、「ホームレス（ホボ）」、ギャング、家族解体、住宅問題、非行少年、売春宿、失業、精神障害、オカルト集団など、まさにパークが新聞記者として、掘り下げたテーマだった。

これらも、新聞記者としての鋭い臭覚、感受性、一人で乗り込む、勇気や体験がなければ析出、発見できない社会問題であった。統計的な数量操作の調査にはなじまない。

移民と地域コミュニティの研究では、ポーリン・ヤング（彼女もポーランド生まれ）のロサンゼルスロシア人街を対象にしたものがある。これは、ロシア人といっても、キリスト教の異端集団であるモロカン派が祖国での排斥をのがれてロサンゼルス一角に「街」をつくるが、やがて後続の日本人コミュニティの一部にとってかわる。

このあたりは、日本人が第2次世界大戦で内陸部へ強制移動させられると、そのあと黒人、メキシコ人が空白を埋め、さらに戦後韓国人がとってかわる。戦後黒人によるワッツ暴動や韓国人への黒人・ラテン系住民の反発から歴史的暴動で歴史を刻む。

モロカン族と似たケースが同じころのドッホボール教徒（ウクライナ系の異端正教徒）のカナダへの逃避である。政府の兵役や役務を拒否し、絶対的な平和主義を追求したためタタール人やコサックから迫害を受け、不毛の地へ追いやられての脱出であった。この脱出にクエーカー教徒やトルストイが支援したことまで似ている。ただ、カナダでは中期的にはホームステッドのルールに基づきマニトバ州等を開墾地を与え定住を促進している。アーミッシュ同様だ。

ヤングやパークは、このモロカン派のような移住地の移動によるエスニック・コミュニティの変化を「遷移地帯（トランジット）」という概念をつけた。

シカゴ学派と日本人コミュニティ研究

ロックフェラー財団はシカゴ大学やアメリカ社会学会の創設で重要なプレーヤーになるが、日本人排斥の動きが高まった 1920 年代、財団傘下の「社会・宗教研究所」を通じて大規模な日本人調査を実施する。これは正確には「東洋人調査」とされているが、事実上、日本人を主要な対象にしたものである。研究所も理事長 J. R. モットは戦後ノーベル平和賞を授与され、来日歴も 10 数回をかぞえる「知日派」の宗教者だが、即座にこの調査をパークにゆだねる。

通常、当時の研究費はひとつのプロジェクトで 300 ドルだとされているが、この日本人調査ではスタート時に 3 万ドルが投入された。

調査の全容は参考文献にしめした拙稿を参照されたいが、西海岸とハワイという日本人の集積のすすんだ地帯をほぼくまなくカバーしたもので、全体計画プログラムの下に北部、北加、南加、ハワイ等それぞれの 5 個の地方調査委員会を設置、各委員会のもとにテーマごとのプロジェクトを組織、調査員を配置した。

たとえば、南加では南カリフォルニア大学のボガードス教授の研究室を拠点に 9 個のプロジェクトを編成した。北部はワシントン大学、北加はスタンフォード大学などだ。

各プロジェクトが実施した調査は、日本人コミュニティでの新聞等の印刷物、資料の蒐集、指導者からの聞き取り、日本人への面接、調査票による調査等である。この際、ネックになるのが、調査チーム側に日本語を理解するものが皆無に等しいことだった。

そこで、英語を解せる日本人の社会団体（教会、組合等）の宣教師や役員、二世の学生、日本語新聞の記者などに協力を求めることだった。少数ではあるが、地元大学等の大学院生も重要な供給源であった。この研究者の卵の参加の意味はおおきく、のちに学者になってゆくものもいた。

日本人移民の比較的はやかったハワイでは、すでに二世の生徒が高校に就学しており、かれらを対象に「個人生活史」を英語でかかせている。ホノルルのマッキンレイ高校など 3 高校で集められた「生活史」は 100 通にもなり、現存している。

ラウシェンブッシュによると、調査は簡単ではなかったようだ。「日本人はネズミのように生みまくる」、「ミカドのスパイ」、「日本人はアメリカ社会に馴染まない、適応しない」といった反日宣伝が「反日委員会」のような職業的な団体で繰り返し行われていたからだ。研究者側はこれに与みていなかったが、調査チームへの妨害がいくつも報告されている。

パークらの研究者は基本的に日本語はできなかつたし、日本人や日本人のコミュニティのことは十分に理解していなかつた。このようなコミュニティの調査に不可欠な前段の理解のために相当な準備をしたのである。当初、それはパークが経験してきたような取材、踏査、日本語文献や印刷物

の蒐集と翻訳、日本人社会団体の指導者や日本語コミュニティ新聞の記者へのインタビューとその翻訳などだ。これらの原物や英文訳の印刷物が多数、ロックフェラー財団の関係研究所や調査に参加した大学のアーカイブスに残存している。(シカゴ大学の F.Mattews ペーパー、ハワイ大学アーカイブスその他)

前述のように、この大規模な調査はそれ自体として報告書が出版されたわけではなかった。理由はアメリカ社会は大学ほど寛容でなかったし、折からの不況、日米関係の緊張等があったろう。調査がなけば進んだ 1924 年 5 月、日本人の入国を遮る「排日移民法」が米国議会を通過したこともある。

のちにワシントン大学の教授なったシカゴ学派のひとりヘイナーがシカゴ大学出版局での出版を打診したとき、パークや担当編集者から困難だという書簡が残存している。パークらへの研究費も圧縮に傾く。

しかし、調査参加の学者の個々の著作はある。ボガーダス、スミスらである。ことに、W. I. スミスは『米国における東洋人二世』『誕生中のアメリカ人——移民同化の自然史』などの著書を残す。同書の扉には移民であった両親への感謝がしめされている。スミスはパーク調査のほとんどに一研究者として、また若干のプロジェクトの責任者として参加、のちハワイ大学で教えることになる。

パークらの業績はわれわれに何をのこしたであろうか。

アメリカ社会に生まれ始めた移民社会、エスニック・コミュニティの掌握である。新聞記者として最初に手がけたのはそのエスニック・グループ独自の新聞活動研究である。1922 年公刊の『移民新聞。その運営』は、アメリカ社会に生まれ始めた移民がどのように、ホスト社会に生き、溶け込むために情報を取得しているか、の古典的な研究である。

移民は祖国においては新聞を読むことはほとんどなかった。経済力、リテラシー、環境、新聞の自由などの制約だ。米国へきて同じエスニック集団のなかで、小さな印刷物から始まりエスニック新聞の読者になる。言葉の壁でホスト社会から直接生活上の情報を得ることは不可能だったからだ。

ここに新聞読者が生まれ、新聞が発刊される、この関係はやがてホスト社会の新聞読者になるステップであった。ホスト社会の大衆新聞、やがて高度な内容の読者へと上昇してゆく。この上昇移動を一世のうちに成就するか、二世、三世へと順を踏むかは人、集団によってことなる。

パーク等によれば、米国のエスニック新聞数は 1884 年 794 種から、1900 年 1,163 種、1917 年 1,323 種と漸増していた。現在でも一千種程度であろう。この新聞の研究が L. R. ワイナーらの移民コミュニティ新聞研究の基盤になったのである。さらに、戦後、M. ジャノビッツが実施・出版したシカゴの地域新聞研究（『都市の装置・コミュニティ新聞』1952 年）のアイデアが生んだ功績は小さくない。この調査はシカゴ市内のすべての街区で発行されているコミュニティ新聞を蒐集、分析したもので、1910 年から 1950 年にいたるまでに新聞数が 82 から 181 にふえていること、いまや週刊コミュニティ新聞は都市の不可欠な装置になっていることを実証した。

我が国も「移民社会」に結果として移行するかもしれない。「移民社会」や「エスニック・コミュニティ」の出現は結果である。われわれの移民新聞研究のグループでは、1993 年に「在日外国人の情報チャンネル」の小論を著したときすでに英語以外の言語によるエスニック新聞が数十種

採取されている。(田村紀雄『国境なき労働者とメディア』1997年)近年では白水繁彦の諸研究(白水『エスニック・メディア』ほか)が集積している。

今日、日本には世界各地から外国人が国境をこえてきており、それぞれの近隣やコミュニティを形成し、言論の自由と新聞発行のための日本での技術、経験を吸収してジャーナリズム活動を満喫している。

【主要参考文献】

- シュラム、W. (1954) 『マス・コミュニケーション』 学習院大学社会学研究室訳、東京創元新社
田村紀雄「都市研究における 1924 年『日本人調査』の位置」『東京経大会誌』190号 (1995年1月)
田村紀雄『海外の日本語メディア』(2008年) 世界思想社
Raushenbush, W., *Robert E. Park. Biography of a Sociologist.* Duke University Press, (1979)

